

【研究ノート】

蒙疆地域における日本のカトリック工作

—伊東重美「大旅行報告書 蒙疆に於けるカトリック宣教師の活動状況」(1939)を手掛かりに—

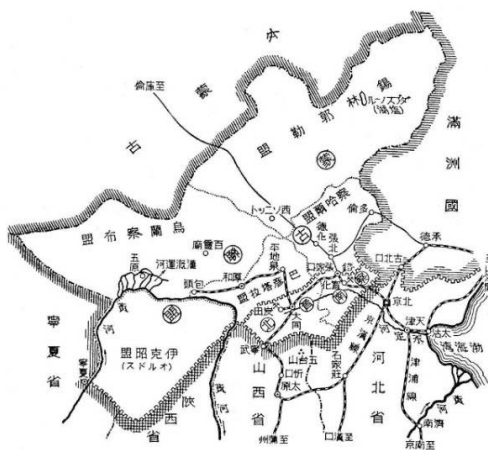
愛知大学東亜同文書院大学記念センター学外研究員 長谷川 怜

はじめに

1937年(昭和12年)に日中戦争が始まると、日本人は国民政府からの護照発給が受けられなくなり、当然ながら東亜同文書院の大旅行にもその影響が及んだ。中国内をフィールドとした旅行は傀儡政権統治地域や日本軍占領地を除いて不可能となり、満洲国や蒙疆などを含めた日本の勢力範囲が調査先になっていった。

蒙疆における同文書院の調査の嚆矢は、1937年に張家口で行われた第34期生の旅行である。また、1938年(第35期)は張北、徳化、西スニト旗などが調査地となった。1939年(第36期)は旧察哈爾班・綏遠調査班・蒙疆遊歴班に分かれて広範囲で調査を実施し、1940年(第37期)は綏遠省と晋北、1941年(第38期)は包頭、厚和、多倫など、1942年(第39・40期)は4班に分かれて蒙疆の主要都市と百靈廟や西スニト旗、西ウジュムチンなど草原地帯へも足を延ばした¹⁾。東亜同文書院の内蒙古調査報告書について、森久男とウルジクトフは明治～大正期のものは調査内容が詳しく、1920年代以降は『支那省別全誌』の刊行によって成果を上げたとする一方、満鉄や関東都督府などによる調査報告書の刊行が増えると、同文書院生の報告書はそれらを利用して簡略化する傾向にあったと分析している。し

かし、旅行日記には見聞した事柄について細かい記載があり、当時の日本人の蒙古認識や蒙古社会の実態を理解するための好資料であると評価している²⁾。



蒙疆地図(出典:高津彦次『蒙疆漫筆』河出書房、1941)

同文書院生の報告書の史的意義をもう一つ付け加えるならば、報告書には現在ではアクセスすることのできない(調査する術のない)情報が多量に含まれていることを指摘できるであろう。1930年代中盤に開始された日本の蒙疆進出を研究する上で欠くことのできない、産業・経済・文化・風俗などあらゆる面の情報を知るための基礎文献として報告書は一級の史料であるといえよう。

1935年から急速に展開された日本の蒙疆進出の目的は、第一に外蒙・ソ連方面からの

赤化防止であり、仮想敵国であるソ連との戦争に備えた軍事的基盤の整備であった。第二にはこの地域に埋蔵する豊富な鉱産資源の確保であった。さらに、森久男が指摘するように、関東軍は蒙疆から中央アジアに防共回廊の建設を目指し、同時に日満独連絡航空路の拠点の建設しようとしていた³。関東軍の工作は、綏遠事件の失敗によって一旦は挫折するものの、日中戦争勃発によって蒙疆へ進出する再度の機会が到来し、関東軍察哈爾派遣兵団が侵攻、察南自治政府・晋北自治政府・蒙古聯盟自治政府を樹立した（1939年9月、三自治政府は統合され蒙古聯合自治政府が成立）⁴。

しかし、察南自治政府と晋北自治政府の境域は漢族の居住地域であり、蒙古独立というスローガンは三自治政府の全てに有効ではなかった。関東軍は、蒙古の独立ではなく蒙疆の高度自治を目指すという新たな方針で統治を進めていくことになった⁵。蒙疆には蒙古民族、漢民族、回教民族が集住しており、それぞれの地域で独自の文化・習俗に基づいて生活を営んでいた。そのため、日本は蒙疆進出の過程で民族政策の推進を行う必要性に直面した。満洲をはじめとする勢力範囲内で展開した文化工作が蒙疆にも適用されていく。特に力が入られた分野が教育、衛生、宗教であった⁶。

文化工作の中でも重要視されたのが宗教工作である。蒙疆における宗教の代表はチベット仏教（ラマ教）であるが、包頭から西北へ進むにつれイスラーム教徒の居住率は稠密になっていく。また、この地域の漢族の中にはカトリックを信奉する人口が一定数存在し、地域の宗教事情は複雑であった。ただし、人口数と政治上の重要性は必ずしも

比例せず、それぞれの民族・宗教に個別に工作を行わねばならなかった⁷。

蒙疆における日本の文化工作については、教育・衛生政策や回教工作に焦点を当てた研究が行われてきた⁸。その一方、これまでの研究の中で十分に扱われてこなかったのがカトリックに対する工作であり、今後の研究課題となっている⁹。

以上の点を踏まえて、本稿では、東亜同文書院第36期生の伊東重美が1939年の大旅行で執筆した「大旅行報告書 蒙疆に於けるカトリック宣教師の活動状況」を取り上げる。まずその概要を紹介し、その上で報告書を手掛かりとして蒙疆地域で日本が展開しようとしたカトリック工作の検討を行いたい。

1.伊東重美「大旅行報告書 蒙疆に於けるカトリック宣教師の活動状況」の紹介

1939年に行われた大旅行において、綏遠調査班に所属した伊東重美が執筆した報告書は、「支那に於ける「カトリック」の歴史的発展」という項目から始まる。伊東は、キリスト教が中国民族の覚醒と成長において道徳・科学の面から大きな役割を担ってきたことを踏まえ、「民衆把握の為の組織と技術、特にその強烈なる熱意等は我が対支国策の組織化に当つても研究摂取に価する」と主張している。伊東は、中国におけるキリスト教の研究が日本の中国進出に役立つものであると認識していたことが分かる。

報告書では、635年（太宗貞観9年）に初めて中国へキリスト教がもたらされた以降の歴史が簡潔にまとめられているが、総説的内容にあたる中国のキリスト教史については紙幅の関係から本稿では割愛する¹⁰。

なお、以下の記述や引用は全て報告書による。

(1) 蒙疆地区カトリック沿革

この節では、近代に至るまでの中国でのキリスト教の発展史を踏まえ、蒙疆におけるキリスト教浸透の実態が詳述される。

近代中国では全般的にプロテスタントの活動が活発であったが、蒙疆ではカトリックが優勢であった。それではなぜ蒙疆ではそうした状態となったのであろうか。以下、報告書に基づき蒙疆におけるカトリックの浸透過程を説明したい。

蒙疆では1883年に初めて綏遠・寧夏両教区が設立され、1885年にはベルギー系のアルフォンズ・デ・ボンが主教として両教区を管轄した。1922年、寧夏省三盛公を中心とする綏西・寧東教区、綏遠を中心とする綏東教区に分立、また寧夏省定遠營以西は甘肅省総堂の管轄となった。綏中、綏西・寧東の両教区で75か所の教堂が設立され、信徒数は8万にのぼったことから、蒙疆地域は北平ローマ宗坐駐華代表公署の直轄となった。教区の概要等は別表の通りである。

(2) 信者の社会層

伊東は、蒙疆地方を「支那本部に於ける生存競争に負けて追はれて出た民」の住む地域であり、「文化低く、知能程度も幼稚」であるとみなしている。また、歴史的、文化的にキリスト教以外にも種々雑多な宗教が原始宗教のように存在する地域であるとする。

それではなぜこうした地域にカトリックが根付いたのかといえば、蒙疆の各教会は匪賊に対抗するため武器を有しており、匪賊の襲来時には教会に信徒を匿って保護した。自身の安全のため、実際に信仰を有していなくても名前だけ教会に属す民衆が多く、統計的な信者総数が多くなったのだという。

また、教会がメリケン粉工場を運営していたり、神父の権限で地域の農産物の価格を決定したりするなど、行政や経済にも関与しているため、教会の保護下であれば生命財産が保障され自給自足できるという状況が出来上がっていたと説明する。

教会の庇護や教会が生み出す経済的利益を享受する「便利主義」から入会した者も、徐々に神父の人格に惹かれ後には心から信じるようになり、その結果蒙疆ではカトリックの力が強くなっていったという分析がなされている。実際に、カトリック教会の

蒙疆のカトリック教区の現況

教区	ミッション	司祭	宣教師数	修道女数	信者数
綏遠	Scheut Mission	Von pych, d (ベルギー系)	73	21	48167
寧夏	Scheut Mission	—	55	44	24147
集寧	chi, Sodan chergy	Fan (支那)	41	67	33397
西灣子	Scheut Mission	de smedt, d (ベルギー系)	68	36	39285
庫倫	—	—	—	—	—
計	—	—	237	168	144996

蒙疆の教区別概要

教区	教区の概要・管轄区域・施設など
綏中教区 (厚和中心)	施薬所や公医院、育嬰堂、小学校を有し、中でも公医院は規模が大きく経費は年間4万円、職員は140名。教区の所有財産のうち地所は数千項目にのぼり牛馬、ラクダなど数万頭を飼育する。不動産によって経済的基盤を整え、利潤を元に貧民と信徒へ貸し付けを行う。また24か所に修道院を有する。
集寧教区 (玫瑰営子中心)	陶林、豊鎮、集寧、商都を管轄。メリケン粉工場を経営し、発電所も有する。信者の出資や土地の貸付金で施設の運営を行い、生産物は神父(中国人)が決定する。
西湾子教区	全域の詳細は不明。大同教区にはベルギー系宣教師20名、ポーランド系宣教師1名。
綏西・寧東教区	—

活動は地域の人的・物的な移動を活性化させ、臨河の西北や綏遠教区では人家の存在しなかった場所に1万人以上の人口を有する集落が誕生したという事例も示されている。

教会は、人々の生命・財産の保護だけではなく、社会事業や教育にも力を入れていた。公医院・診療所、慈善関係の施設(養老院、孤児院など)を運営し、X線を用いた高度な医療も行われていた。また、厚和哲学院、教会設立の大伯高級小学校なども存在し、蒙疆におけるカトリック信者は知的程度が高く他より優秀であったとされている。優秀な生徒は教会の援助を受けて大学や専門学校に通うこともできた。

なお、日本の傀儡政権が発足すると教会が運営する学校では政府が制定する満洲国編纂の教科書を用いた。

教育方針としては「階級闘争、排外排日は

人類愛の立場に及^びする(筆者注:反する)と云ふ純宗教的立場」をとり、また日中戦争勃発後においてもベルギー系の神父たちは、母国が日中戦争にほとんど関係を持たなかったことから排日教育を行う理由がなく、むしろ日本との協調方針が採用されていた。教会が運営する学校に勤める中国人教師も同様のスタンスをとっており、その点プロテスタント系の学校とは異なっていた。

(3) 事変との関係

伊東は、中国におけるキリスト教の通史的な記述や、蒙疆地区のカトリックに関する基礎データを詳細にまとめるだけでなく、時局を意識し、日中戦争勃発後にカトリック教会がどのような対応を行ったのかについても調査内容を記述している。

まず、教会の被害状況が述べられるが、日中戦争に巻き込まれた蒙疆の各地域では、

教会の被害は比較的少なく、各教会は任意で救済活動を展開した。組織的な救済活動は行われなかったものの、難民収容、病院における罹災者・戦傷病者の看護、防疫がなされていた。

すでに教育の項目で見た通り、反日的な感情をカトリック教会は持っておらず「最初より好意を寄せ現地の事情を知悉して日本に協力」した。

(4) 結語

結語には、調査の総括と時局を踏まえた分析が記述される。蒙疆におけるカトリックの特徴は地理的困難を廃して「超人的努力と忍耐」で僻遠の地に教会が建設されたことであり、教会を中心とした村づくりが実現され、信徒と教会は精神的・物質的に利害を共にし強力な組織を生成したとする。また、蒙疆地区では対日感情と日本の傀儡政権に対する態度が極めて協動的であり、新政府側が摘発を行う必要はなかった。

さらに、教会は宗教的活動ばかりでなく、農民には種子や馬種の改良などの技術を提供し、同時に発電機、メリケン粉工場、ラジオなどを保有して、「民度低きこの地域に良く近代的知識を入れしめ」ていること、医院や施療院など医療・衛生設備を整備していることも特徴として挙げられている。こうした教会の在り方を総括して、伊東は「蒙疆に於ける宗教中、最も強固にして勢力を有し近代的文化水準に達せんと努力」していると高い評価を与えている。

日本が「これらカトリック教者と接近することはその対支文化工作上必要」であり、「彼等よりして外国に宣伝せしめ赤化に対する黒として階級闘争、排外、排日」を防止

し、信徒にもよく日中戦争の目的を認識させることが重要であるという主張がなされる。

19世紀以来教会が継続してきた社会的事業を通じた民衆把握工作は、日本も参考にするべきものであると伊東は考えたようである。報告書には、平山政十がこうした文化工作に取り組んでいるが、日本のキリスト教徒からの接近が「最も近道」であると書かれている。キリスト教を通じた日本と蒙疆の提携の可能性を伊東は示したのである。

2. 平山政十と蒙疆のカトリック

本報告書の結語では、対中国文化工作の一環として蒙疆のカトリックに接近し、「聖戦」＝日中戦争の意義を理解させ、また社会的事業を通じて民衆把握を行うべきであるとの主張が見られる。そして、すでにこうした工作を「張家口の平山政十」が実施していると記述されている。しかし、平山について報告書では名前が登場するだけでそれ以上の情報を記していない。平山とはいかなる人物であろうか。

平山は、1880年(明治13年)に長崎の浦上に生まれた。その家系は「先祖代々のカソリック教徒」¹¹であったというから、平山家は江戸期にはいわゆる隠れキリシタンであったことになる。1899年(明治32年)に長崎英仏語専門学校(海星中学の前身)を卒業し、1905年にフランス・マルセイユへ留学した。帰国後、朝鮮へ渡り、京畿道高陽郡で牧場経営と牛乳搾取業を行い城大附属医院内の売店で牛乳を専売し経済的な安定を得た¹²。

山梨淳と徐鐘珍の研究によれば、朝鮮総督の斎藤実は宗教政策に力を入れ、平山を

信頼して懇意の関係を結んだ。後に平山が宗教的な情熱に加え、世界における日本認識を高めるという愛国主義的目的から1931年に映画「殉教血史日本二十六聖人」を製作した際にも援助を行ったという¹³。斎藤を媒介として平山と陸軍の間につながりが生まれたと考えられる。

平山は、昭和6年(1931)に京城駐在白耳義国名誉領事に就任する¹⁴。これはベルギー皇帝アルベールが「京城ニ白耳義国領事ヲ置クノ必要ヲ認メ平山(政十)氏ノ忠実精勵ニシテ才幹アルヲ知り同氏ヲ簡拔」したことによる。この委任は犬養首相の決裁で裁可が仰がれ認められている。ベルギー政府は平山に対して、ベルギーと朝鮮の経済関係の緊密化を期待したとされるが¹⁵、いかなる関係で平山がベルギー皇帝から信頼を得て名誉領事に就任したのか、その詳細は不明である。

その後、平山は映画の興行・宣伝のため2年間にわたり渡欧し帰国する。日中戦争勃発に伴う関東軍の策動で蒙疆地域に三自治政府(傀儡政権)が設立されると、従来の陸軍との緊密な関係に基づき張家口特務機関囑託となり、蒙疆地域におけるカトリック工作に携わることとなった。

平山は張家口へ移った後、現地のカトリックの状況や実態把握に努め、詳細なデータと解説、蒙疆地域で活動する宣教師などの写真も豊富に掲載した『蒙疆カトリック大観』(蒙古聯合自治政府、1939)を出版している。平山は同書序文で親日教育の重要性を述べ、「人間の意思の疎通、精神の融和を図る」ためには宗教運動こそが最も効果があり「カトリック工作に多大の期待」をかけていると記す。

この書籍は、東亜同文書院生の伊東が蒙疆調査旅行の報告書執筆の際に参照したことがうかがわれ、当時の蒙疆におけるカトリック事情を伝える一級の資料といえる。

平山は、後段に述べるように蒙疆からのカトリック教徒訪日の際に斡旋役を務めるなど、陸軍の政策に多方面で関与していたが、現段階では平山が蒙疆でいかなる活動をしたのか、全体像を示す史料は見つかっていない。今後の調査課題としたい。

3.蒙疆における日本のカトリック政策—蒙疆カトリック教徒の訪日イベントを中心に

傀儡政権の成立後、日本は蒙疆におけるカトリックの全体像を把握しようと努めた。蒙疆のカトリック教会においては、同文書院の報告書でも述べられているごとく、歴史的にベルギーの宣教師が活発な活動を展開してきた。かつてフランス語を学び、また朝鮮でベルギーの名誉領事を務めた平山の経験が、これらベルギー人宣教師との関係構築に有利に働いたであろうことは想像に難くない。

平山を通じて現地での情報収集を進める一方、外務省の文化事業の一環として蒙疆のカトリック教徒の日本視察が計画された。これは1938年6月1日～7月9日の39日間にわたり、蒙疆のカトリック教徒17名を京城、大阪、京都、名古屋、横須賀、横浜、東京、別府、長崎、博多、小倉、門司、下関に案内し、日本への理解を深めさせることを目的としたものであった¹⁶。参加者は県長や教師、牧師などで構成されていた¹⁷。

メディアはこの訪問団を「ソ聯の支那赤化工作に対する一大トーチカといはれる蒙疆五十万のカトリック教徒代表」と評し、

「今次事変の真意義を理解し皇軍の活動に非常なる感謝を寄せ憧れの日本見学に来朝」と報じた¹⁸。

日本では観光名所以外にも東京帝国大学や横須賀軍港、新聞社など教育や軍事、メディア関係の施設を多く見学し、その都度、外務省文化事業部から便宜供与を求める書類が発送された。蒙疆においてカトリック教会が近代化や教育水準の引き上げを担ってきたことを日本側はよく理解し、今後は日本がそうした分野をリードする存在であることを訪問団にアピールする狙いがあったのであろう。

形としては外務省の文化事業（東方文化事業）の一環として行われたイベントであったが、帰国後には張家口特務機関長の松井太一郎と蒙疆聯合委員会最高顧問の金井章二の連名で礼状が出されており、関東軍と外務省が協力して実施したことが明らかである。その礼状は以下の通りである。

先般、察南、晋北、蒙古聯盟自治政府ノ統治区域タル蒙疆在住五十万「カトリック」教徒代表日本訪問ノ節ハ御懇篤ナル御歓待ニ預リ一同深謝罷在候...彼等カ日本ニ学ヒシモノ多々有之...東洋永遠ノ平和ヲ確立セントスル全日本国民ノ崇高ナル精神ニテ蒋政権ノ放送スル如キ利欲ニ立ツ侵略的意志ノ絶無ナル点ニ御座候。

...一意蒙疆民衆ニ日本ノ真意ヲ伝へ、宗教的立場ヨリ益々民衆ヲシテ日本ノ使命ニ協力セシメ理想郷ノ完成ニ邁進スルヲ誓ヒ申シ候...日蒙ノ物心ニ方面ヨリノ握手協力ハ東洋平和ノ基礎ヲ固カラシメ赤魔排撃ニ与ヘテカアルモノト奉存候...¹⁹

ここでは、感謝と共に、蒙疆のカトリッ

ク教徒による日本への協力の意思や、蔣介石政権の対日宣伝がまやかしてであることを訪問団がよく理解したことが記されている。また、訪問団参加者の感想文を報告する文書には、感想文をまとめて評して「ロ々ニ讚美シ措カヌアラユル“ニッポン”」と記載されており、主催者（外務省・関東軍）側は、この訪問事業を成功と認識していたことが分かる。感想文の一例を挙げておきたい。

蒙疆カトリック訪日団感想

...約四十日ニ亘リ聖戦下ノ日本各地ヲ詳細ニ視察...カトリック精神テ蒙疆カトリック五十万教徒ト日本トヲシツカリ親善ノ帯テ結ンテ...日本国民位親切テ国際親善ニ徹底シタ国民ヲ未タ知ラナイ。宝塚劇場テハ美シイ少女達カ五族ノ少女ニ装ヒ支那ノ唄ヲ歌ツテ歓迎...極メテ礼儀正シイ国民...工場ヲ初メ沢山ノ近代施設ヲ見タカ日本国民ノ科学的研究心ノ旺盛ナ事ハ素晴ラシイ...²⁰

ここでは日本人の親切さに対する驚きや見学地での感激が記されている。政策主体側が企画し総力を挙げて歓待したイベントである以上、悪感情を抱かせることはなく、また日本側に提出する感想文にマイナス要素を含んだ内容を書くはずもないが、それを差引いてもこうした文化交流事業を通じて日本を理解させ親近感を抱かせる試みはある程度成功していたといえるだろう。

実際、宇垣外務大臣宛に張家口の森岡総領事が送った意見書（1938年7月26日）には「過般当地特務機関囑託平山マサジュー

ノ率ユル蒙疆天主教訪日使節団ニ対スル本邦各方面ノ熱誠...俄然親日感情ヲ強メ予想外ノ効果ヲ納メタ」と書かれている。森岡はこの成果を踏まえて「日本側ヨリモ天主教関係及東洋文化関係ノ学者ヲ以テ当方視察団ヲ組織セシメ、蒙疆主要地域ニ派遣シテ講演等ヲ行ハシムル」ことを提案した²¹。

記録上、意見された日本からの派遣団は実施された形跡がないが、蒙疆からの訪問団の翌年、1939年に東亜同文書院の蒙疆調査が行われ、同文書院生の伊東が研究テーマに蒙疆のカトリックを選定したことは、当時カトリック工作がいかに関心を集めていたのかを示す一つの証拠である。

おわりに

本稿では、まず1939年の東亜同文書院の大旅行に参加した伊東重美の報告書の内容を紹介した。

報告書における通史・基礎データなどを示す部分は、恐らくは全て伊東が一から調査をしたというよりも、平山政十『蒙疆カトリック大観』や現地で提供された資料類を参考にして執筆したものであろう。すでに公刊されている資料を閲覧したにせよ、報告書には全編にわたって現地でしか入手できない情報が掲載されていることは間違いない。

一方、日中戦争開始後の蒙疆におけるカトリック界の対日感情の分析や、今後日本が取るべき方針に関する伊東自身の主張は、

つぶさに現地で調査を行い導き出されたものであることが伝わり、現地を実見した伊東にしか記述することのできない内容となっている。

次に、報告書の内容を手掛かりとして当該期の蒙疆における日本のカトリック政策の一端を検討した。

1939年に蒙疆のカトリック関係者の日本訪問が行われた後、張家口の特務機関が日本からも訪問団を送出すべきという意見書を外務大臣に宛てて提出したことを確認したが、伊東も同様に日本のキリスト教徒を通じた文化工作の展開を主張している。情勢を踏まえた的確な意見を示していると評価でき、そういう点からも伊東の報告書の信憑性や史料的な価値は高いといえるだろう。

蒙疆における日本の文化政策の研究において、カトリックに焦点を当てたものはほとんど存在しない。史料的な制約の大きい分野であり、大旅行の報告書は重要なデータを提供する基礎文献として位置づけられよう。

今後は平山の著作、そして当時の公文書や新聞記事などを総合して分析を行い、現地においていかなる宗教工作が展開されたのか、また太平洋戦争勃発後にベルギーが対日国交の断行を行うと蒙疆でのベルギー人宣教師に対する対応に変化があったのか、など多角的な視点からの研究を継続したい。

¹ 内蒙古調査の概要や行程の詳細については、森久男・ウルジトクトフ「東亜同文書院の内蒙古調査旅行」(『愛知大学国際問題研究所紀要』136号、2010) および「東亜同文書院の内蒙古調査旅行(続き)」(同138号、2011)を参照。

² 前掲「東亜同文書院の内蒙古調査旅行(続き)」248ページ。

- ³ 森久男『日本陸軍と内蒙工作 関東軍はなぜ独走したか』（講談社選書メチエ、2009）268～269 ページ。
- ⁴ 詳しくは、内田知行・柴田善雅編著『日本の蒙疆占領 1937-1945』（研文出版、2007）、広中一成『ニセチャイナ』（社会評論社、2013）を参照。
- ⁵ 前掲『日本陸軍と内蒙工作』271 ページ。
- ⁶ 「北支蒙疆 興亜建設の現地報告 6」（『大阪朝日新聞』1939年8月1日）。
- ⁷ 橋本光宝『蒙古の喇嘛教』（仏教公論社、1942）1～3 ページ、東亜研究会『最新支那要覧』（東亜研究会、1943）729～730 ページ、高津彦次『蒙疆漫筆』（河出書房、1941）380～381 ページ。
- ⁸ 澤井充生「日本の回教工作と清真寺の管理統制 蒙疆政権下の回民社会の事例から」（『人文学報』483号、2014）、新保敦子『日本占領下の中国ムスリム 華北および蒙疆における民族政策と女子教育』（早稲田大学出版部、2018）何広海「蒙疆学院の研究」（『人間発達研究』33号、2019）、財吉拉胡「日本占領期の内モンゴル西部における医療衛生の近代化」（『アジア経済』60巻2号、2019）など。
- ⁹ 日中戦争期の宗教工作に関する研究として松谷暉介『日本の中国占領統治と宗教政策 日中キリスト者の協力と抵抗』（明石書店、2020）がある。日本の宗教政策をめぐる外務省や陸軍の対応、占領地における政策の展開、日本キリスト者の戦争の関わりなどを分析している。ただし、本書の分析対象地域に蒙疆は含まれていない。
- ¹⁰ 中国におけるキリスト教の歴史については、石川照子ほか『はじめての中国のキリスト教史』（かんよう出版、2016）を参照。
- ¹¹ 宇宙社編『宗教体験実話 第二輯』（宇宙社、1933）102 ページ。
- ¹² 「京城駐在白耳義国名誉領事平山政十御認可状御下付ノ件」（「公文雑纂」昭和六年第二十巻・外務省三〈御委任状・御認可状〉纂 01938100、国立公文書館所蔵）。
- ¹³ 山梨淳「映画『殉教血史日本二十六聖人』と平山政十 一九三〇年代前半期日本カトリック教会の文化事業」（『日本研究』41号、2010）183 ページ、徐鐘珍「斎藤実総督の対朝鮮植民地政策 「文化政治」期の宗教政策を中心として」（『早稲田政治公法研究』64号、2000、215 ページ）。
- ¹⁴ 「京城駐在白耳義国名誉領事ニ対スル委任状訳文」（前掲「公文雑纂」）。
- ¹⁵ 前掲「映画『殉教血史日本二十六聖人』と平山政十」203 ページ。
- ¹⁶ 「蒙疆カトリック教徒日本視察便宜供与」（H-6-1-0-4_3_010、外務省外交史料館蔵）。
- ¹⁷ 「蓮沼兵団 蒙疆カトリック教徒信友日本視察団見学ノ件」（陸支普大日記-S13-10-152、防衛省防衛研究所蔵）。
- ¹⁸ 「蒙疆旧教代表来日」（『東京朝日新聞』1938年6月9日）。
- ¹⁹ 前掲「蒙疆カトリック教徒日本視察便宜供与」。
- ²⁰ 同上。
- ²¹ 「意見書」（前掲「蒙疆カトリック教徒日本視察便宜供与」所収）。